

和魂洋才 世界のリーダーへ

武田薬品工業^⑫

挑戦 する企業

技術ではない

「基本的に、デジタルは技術ではない。機敏に動くための心構えだ」。タケダデジタルアクセラレータージャパンヘッドの大塚勝は、武田薬品工業におけるITの位置付けをこう説明する。

武田ではIT推進担当者、研究開発や営業といった各部署にIT関連の知見を「移植」し、そ

デジタルで文化を変える

各部署が主体的にIT活用

それぞれの部署が主体的にIT活用の施策を進める。大塚は「各部署が従来持つ」業務知識に、デジタル的な考えが加わることでソリューション（問題解決）が生める」と指摘。ITの専門家を使うか」が重要と分析。

インターネット経由で気軽にアプリケーション（応用ソフト）を使えるようになった。大塚はこうした環境下では、「技術（の出身）を知っている」というより、技術をどう使うか」が重要と分析。

国内医療用医薬品事業では、人工知能（AI）や音声認識で医薬情報担当者（MR）の業務効率向上を模索している。具体的には、MRがスピーカーに向かってその日の予定を問い合わせる

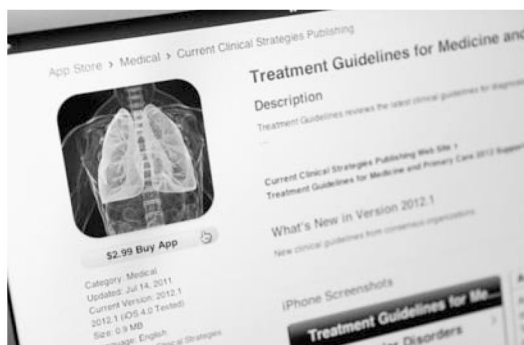
各部署に派遣し、そこで働かせ続ければ良いわけではないとみている。近年は米IT大手などがSaaS（サービスとしてのソフトウェア）を普及。利用者はサーバーを自社運用せずとも、イ

業務が変わった際は、必要になったITを外部から調達できる目利きの力があればよいとする。

現場の目線で

実際、現場での取り組みも進みつつある。例え

ITを業務改善にどう生かせるかが問われる（イメージ、ブルームバーグ）



線でニーズの整理に集中し、開発を担う外部業者への確に伝える方針だ。

大塚はITによる変革の成否を測る物差しについて、「事業そのもので何を生み出したかは、もちろん見る。だが会社の文化の変化や、人材育成にどう貢献したかといった副次的な要素も考慮する」と話す。ITは、その導入自体が目的ではない。ITを通じて社員の意識や業務をどれだけ変えられるかが試される（藤垣元明）。現場の目線（敬称略）